風に吹かれる裸木

中山義秀

1960年
雪華社版

風に吹かれる裸木奥附昭和參拾五年貳月
貳拾日印刷昭和參拾五年貳月貳拾五日初
版發行著者中山義秀發行者栗林茂印刷者
猪瀨英一印　刷所東京都
文京區春日　町三丁目四
番地猪瀨印　刷株式會社
美術印刷カ　タログ社製
本所大完堂　發行所東京
都中央區京橋一丁目七番地株式會社雪華
社電話東京五六一局六八三八番四〇七七
番振替東京四二一五〇番定價參百五拾圓

目次

凡将の裔……三
吹雪の涯に……三五
さみだれ草紙……六三
悪党……八七
物ぐるひ……一三
風に吹かれる裸木……一四七
書かでものこと……三二

風に吹かれる裸木

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡将の裔

一

織田三介信雄は信長の次男だが、父に似ず凡庸な男だつたと云はれてゐる。

永禄元年（一五五八）に生れ、寛永七年（一六三〇）、七十三の高齢で世をさつた。その生涯は信長、秀吉、家康、秀忠、家光の五代にわたつてゐる。

戦国期から泰平にうつる激浪時代を、ともかくも無事に生きぬくことができたのは、ひとへに彼が凡庸な故だつたからであらう。

彼の腹違ひの弟三七信孝は、彼より二十日余はやく生れたが、母が賤しかつたため届出がおくれ、三男にされてしまつた。それが口惜しさに柴田にくみして兄と争ひ、二十六歳の若さでたうとう腹をきらねばならぬやうな始末となつた。元来が気性のはげしい男だつたやうである。

信雄は十三歳で伊勢の国司、北畠中納言具教の養子となり、父の死後尾張、伊賀、南伊勢五郡、およそ百七十万石ほどを領して、官は正二位内大臣までのぼつた。

父の余光である。その余光をかさにきて家康をたのみ、小牧、長久手の戦をおこしたが、たちまち秀

吉に丸めこまれてしまつた。愚人といふよりも、人が善いのであらう。

天正十八年（一五九〇）八月、小田原落城後、北条領配分のために、諸侯の移封がおこなはれた。家康が関東へ移つた跡を、信雄がひきつぐことになつた。

三河、遠江、駿河、甲斐、信濃の五ヶ国である。しかし信雄は、父や養父の遺領、尾張、伊勢に執著して、秀吉の命にしたがふことを拒んだ。

秀吉は怒つて彼を、下野国烏山二万石の僻地に追ひやつた。信雄は小田原へ千騎の大将となつて出征してきてゐたが、七十人ほどの従士をひきつれ、しほしほとして烏山へ立去つたさうである。

信雄は時に三十三歳、これが運命の顛落となり、彼の流浪の生活がはじまる。信雄はついで出羽の秋田へ移され、やがて養父の故地、伊勢の朝熊（あさま）へかへることを許された。

朝熊は伊勢神宮にちかい、風光明媚な閑処である。彼はそこからさらに、伊予の道後の湯におもむいた。牢人の境涯にあまんじて、ゆるゆる湯治を楽しむつもりだつたらしい。善人の彼は諦めがよく、運命に従順だつたやうだ。

朝鮮役がはじまり、秀吉が文禄元年（一五九二）四月二十六日、肥前の名護屋へきた。信雄は道後から秀吉の許へ、挨拶にいつた。

それで秀吉の機嫌がなほり、信雄は秀吉側近のお伽衆に加へられ、十一歳になる彼の長男秀雄（ひでかつ）は越前大野五万石の城主にとりたてられた。

秀吉はやはり信長の遺児である信雄を憎んで、冷遇することに後ろ目たさを感じてゐたのだ。秀吉にさういふ気をおこさせるといふのも、つまり信雄がそれだけ好人物だつたからに違ひない。

信雄はその後大坂の天満に屋敷をもらひ、そこに永住することになつた。秀吉の死後もさうである。淀殿と彼とは従兄妹（いとこ）の間柄だから、豊臣家の世話になつても、さして心の負担をいだかなかつたのであらう。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の役がおこつた時、彼は動揺した。彼は四十三歳、子供の秀雄は十九歳、秀雄の領地は丹羽長重の所領にちかく、天正十八年に生れた五男の高長は、加賀金沢の前田家にあづけてゐる。しかも丹羽と前田は、互に敵側となつた。

それで秀雄はなんとなく丹羽方につき、父の信雄はひそかに徳川へ心をよせ、畿内の模様を関東の家康父子にしらせてやつた。首鼠両端といふところだが、これは当時信雄父子に限つたことではなかつた。諸侯の大概がさうであつた。

役後、秀雄は領地を返上して、江戸浅草へ隠退し、将軍秀忠から特に扶持米（ふちまい）三千俵を賜はることになつたが、慶長十五年（一六一〇）、父に先だち二十九歳で亡くなつた。

信雄には八男四女、あはせて十二人の子供がある。祖父信秀には十九人、信長に男女二十三人、いつたいに子福者の家系で、あながち信雄が牢人生活のひまにまかせ、子供ばかりつくつてゐたわけではなかつたらしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

慶長、元和の大坂役に、信雄は大坂方から入城をさそはれたが、天満の邸をにげだして京都へゆき、家康、秀忠に謁した。

こんどは大坂方と徳川方と、はつきりと勝敗の帰趨がわかつてゐたから、信雄もさすがに迷ふところがなかつた。齢も五十七歳になつてゐる。

大坂落城後、信雄は徳川から上野と大和と両国のうち、五万石をあたへられた。そのうち上野国小幡領二万石を、四男信良（のぶよし）につがせ、大和国宇陀郡松山三万千二百石を、自分の所領とした。彼の次男三男は、早世してゐる。

信雄は領地へゆかずに、晩年を京都でおくり、三代将軍家光の寛永七年四月三十日、北野の自邸で目をつぶつた。

父信長、兄信忠の本能寺の変、弟信孝の自刄、秀吉の最期、豊臣家の滅亡、家康、秀忠の死と、いづれも非凡ともいふべき人々の死を見おくつた後、彼は平和な死をとげてゐる。凡人の幸とでも、云ふべきなのであらうか。

彼の遺領を

五男の高長が相続した。そして実はこれからが、話の発端なのである。

高長は運の好い男で、兄の信良の子信昌が二十六歳で病死したため、自分の四男信久を信昌の養子にして、その跡をつがせることになつた。信雄入道常真の五男に生れながら、期せずして父の遺領をそつくり、自分達父子でうけついだことになる。

高長は延宝二年（一六七四）八月十六日、自領松山の館で亡くなつた。行年八十五歳。生前父の遺命で、松山の近傍岩室村に一宇をおこし、亡父の法号をとつて徳源寺と名づけ、織田常真家の菩提寺とした。

嫡男長頼が家督をつぎ、所領の中三千石を弟長政にわかつた。長頼は従四位下の侍従山城守となり、元禄二年（一六八九）四月三日、七十歳で歿した。

信雄、高長、長頼と三代つづいて、いづれも長命である。信雄は武将としては落第だつたが、軍事以外の諸芸には堪能だつた。秀吉のお伽衆になつたのも、さういふ芸能をかはれたからであらう。

その祖父の血をひき、長頼も謡、お能にすぐれてゐた。五代将軍綱吉の前で、能を演じ、人々の賞讃をえたことがある。それくらゐが一生中の晴の出来事で、父祖三代長命ではあつても、これといふ目ざましい事蹟は、何も残してはゐない。いはば平凡だつたことが、彼等の長命だつた原因のやうなものである。

もつとも、彼等の家中まで、平安無事だつたわけではなかつた。信長が元和元年七月、宇陀庄三万千二百石を賜はつてから、元禄二年の長頼の死にいたるまで、七十四年の歳月が流れてゐる。

三万石の城主は、戦時ならば兵士およそ七、八百人の旗頭、普段でも足軽をのぞき百騎あまりの家臣がゐる。それ等の中で七十四年間、何も事件がおこらずにすむはずがなかつた。

ことに三代目長頼の時分になると、泰平になじんでくるにつれて、士気がゆるみいろいろ好ましくな

い事件がおこつてくる。

江戸の屋敷に村尾喜左衞門といふ、二百石取の足軽頭がゐた。彼の組下に又兵衞といふ小者がゐて、小才がきくため十石二人扶持の足軽にとりたて、彼の寄子にしてゐたところ、次第に増長して大酒を好み、吉原通ひのはて、自分の切米（扶持）を抵当に借銭がかさみ、首がまはらなくなつた。

喜左衞門が彼を部屋によびつけ、きびしく叱責した後、今後非行を改めなければ、殿に上申すると威かすと、又兵衞はすでに最早やけくそになつてゐたらしい。

喜左衞門が春の日暮がたすぎ、長屋の部屋でまだ灯もともさずに、一人で居睡りしてゐるところへ忍びより、一刀の下に斬り殺すと、血刀を鞘にをさめる余裕もなく、そのまま羽織の下におし隠して、お屋敷の台所を通りぬけ、表門のくぐりからのがれ去つた。

折柄屋敷の中間が二升樽をさげ外から帰つてきて、くぐりを通りぬける際、互にそれとは知らずにすれちがつた。

中間が台所へきてみると、広く剃つた頭の月代から血がしたたり落ちてくる。門のくぐりに釘が出てゐて、それで傷つけたものであらうと、手当をしてゐると、人々がより集つてきて疵をしらべ、

「これは釘で、ひつ掻いた疵ではない。刀の刃先にかけられて、すうつと切りさかれたものだ」

さう云ひあつてゐる時、

「やア何者か、村尾を斬りたるよ」

その一声で屋敷内が大騒ぎになり、各出入りの門をしめきつて、提灯を万燈のやうにともしながら、長屋長屋の人数を改めると、又兵衞のゐないことがわかつた。

そこへ生駒八郎兵衞が、十文字の槍をひつさげ、長屋から駈けだしてきて、

「たとひ鬼神なりとも、八郎兵衞がこの槍をもつて仕留めてくれん」

と大声に呼ばはり、力みかへつて躍りまはつたが、犯人逃走後のことだから、誰も彼の空威張に、ただ恐入るよりほかはなかつた。

山城守長頼はその節在国で、江戸へ参覲に出かける途上にあつた。道中飛脚が馳せつけてきて、村尾の横死を注進すると、お供をしてきた村尾喜左衞門の倅三弥が、さつそく父の仇討を決意して、殿にお暇を願ひでた。

長頼は彼の孝心を賞讃しながら、親しく差添への脇差を彼に与へ、

「首尾よく本望を達して、一日もはやく帰参いたすやうに」

と懇な言葉さへ賜はつた。

三弥はそれから諸国をへめぐり、又兵衞が医者にばけて、伊勢の山村にひそんでゐることをつきとめた。

三弥はそこの村長(むらをさ)を訪ね、仔細をつげて仇討の助力をたのんだ。

伊勢の大和の隣国である。とりわけ松山は、伊勢路にちかい。その織田の家中だといふので、村長は

三弥の言葉を信用して、こころよく彼の頼みを承諾した。

三弥を納戸の部屋にひそませ、その前の座敷に村長の女房を寝かしつけ、腹痛をおこしてゐるていにして又兵衛を迎ひにやつた。

又兵衛は何の用心もなく、単帯の着流し無腰姿でやつてきた。女房の寝床にすりよつて、まづ彼女の手をとり脈を見たが、異状がなかつた。

つぎに彼女の内懐へ片手をさし入れ、下腹をなでまはすと、三十代の妻は気味わるさうに、身をよぢつて医者の手をさけたさうなしぐさをする。

腹痛がはげしければ、撫でさすられるのを喜びこそすれ、身をよぢつて、診察をいやがるていはないはずだ。

又兵衛は目さきの利く男だから、すぐ変だなと感づいたらしく、病人を診ながらそれとなく、あたりの様子に気をくばつた。

座敷の隅にひかへてゐる、村長の方を窺ふと、村長は三弥が納戸のかたから躍りだすのを、今か今かと待構へてゐるため、両手に汗をにぎり、息づかひも荒々しく、眼を血走らせて全身ををののかせてゐる。

腹痛だといふ女房に異常がなく、村長の様子のただならないのを見ると、又兵衛は携へてきた薬箱から、丸薬の包をとりだして、

「これを飲んで、利かないやうだつたら、誰かよその人に、もう一度診せさつしやるがよかろ」

さう云ひすてるなり、手早く薬箱をもつて、さつさと帰つて行つてしまつた。

村長は医者の帰るよりはやく、納戸の板戸をがらりとひきあけ、

「お侍、どうしたことぢや、敵が目の前に現はれてゐるのに、なぜ切つて出なさらぬ」

三弥は刀の鯉口に手をかけたまま、腰がぬけたみたいに納戸の中に匐ひつくばつて、がたがたと顫へつづけてゐたが、村長の呶鳴り声にからうじて口を動かし、

「な、何としたことか、こ、この足腰が、ききませぬ。ま、まるで何者か、後よりしつかりと、み、身共のからだを、押へつけてゐるもののやう。し、しかし、こ、今後ははづさぬ。村長殿、も、も一度、かの者を呼んできて下されい。し、死物狂ひで、きつと、う、討ち申す……」

さう喚きたてながら、額を畳にすりつけて頼むので、村長はよぎなく彼みづから迎へに行つてみると、又兵衛は家財をとりちらかして、とうに逐電してしまつた跡だつた。

村長は腹をたてて帰つてくると、

「この大たわけめ。貴様のやうな者は、一刻も家においておけぬ。又兵衛の後を追ひかけ、とつとと此処を出てうせろ」

追出された三弥は、それつきり行方がわからず、又何処で敵を討つたといふ噂も、家中に聞えてこなかつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com